

特別寄稿

## ボストン訪問報告

穴田 有一<sup>A</sup>

論文賞の副賞として、アメリカ合衆国のボストンを訪問させていただきました。副賞を提供してくださったボストン在住の近藤信之氏に心から感謝いたします。また、論文賞に選出してくださった小野博会長はじめ審査にあられた理事の皆様、心から感謝いたします。

訪問の期間は、2016年11月15日から11月20日まででしたが、移動日を除くと実質4日間の滞在でした。その間に、中高一貫校の Noble and Greenough School と University of Massachusetts Boston および Boston College の2つの大学を訪問し、さらに、全米で就学している日本人学生を対象としたキャリア・フォーラムも視察しました。実質4日間にこれだけの予定を詰め込んだため、思いのほか忙しい滞在でしたが、ボストン滞在最終日の近藤氏との素晴らしい会食は、とても楽しく、また、くつろいだひとときとなりました。訪問先、日時およびお会いした方をまとめると、次のようになります。

11月16日 (水)

7:40~13:00: Noble and Greenough School  
(Address: 10 Campus Drive, Dedham, MA 02026)  
Ms. Tomoko Graham

11月17日 (木)

13:00~15:30: University of Massachusetts Boston  
(Address: 100 Morrissey Blvd., Boston, MA 02125-3963)  
Vice Provost Dr. Schuyler S. Koban, Dr. Takuya Minami, Assistant Vice Chancellor John A. Drew

11月18日 (金)

10:00~12:00: Boston College  
(Address: Chestnut Hill, Boston, MA 02467)  
Director of Liberal Arts Dr. Mary. T. Crane  
15:00~17:00: 30th Boston CAREER FORUM  
近藤信之氏と見学、IACE TRAVEL アメリカ副社長 成田敦氏が対応

11月19日 (土)

18:00~: SCOTCH & STORIES で会食  
(Address: 15 Beacon Street, Boston, MA 02108)  
出席者: 近藤信之氏、ボストン日本総領事館・領事 藤井麻理氏、IACE TRAVEL アメリカ副社長 成田敦氏、穴田

11月15日、小雨が降るボストン・ローガン・国際空港に到着したのは、午後5時でした。Airport Shuttle で地下鉄 Airport 駅まで行き、そこから地下鉄の Blue Line、Orange Line を乗り継いで、ボストン中心部の Back Bay 駅に着いた時には、雨脚が相当激しくなり、午後7時頃、Copley Square 近くのホテルに着いた時には、ジーンズの裾もスニーカーもずぶ濡れでした。11月のボストンは、秋も深まり東京よりもだいぶ気温が低かったけれども、札幌に比べると、予想以上に暖かく、過ごしやすい気候でした。翌日は、早朝から Noble and Greenough School を訪問することになっていたの、ホテル近くのファストフード店へ行き、ボストン名物のロブスターロールとクラムチャウダーで簡単な夕食を取り、早めに休みました。

11月16日は、朝7時頃の電車で出発するため、早々にホテルの朝食を済ませ、Back Bay 駅に向かいました。曇り空でしたが雨は上がっていたので、足元は大丈夫でした。Back Bay 駅から Commuter Rail の Needham Line で出発し、約20分後に Hersey という無人駅で降車し、車で迎えに来てくださった Tomoko Graham 先生に Noble and Greenough School まで案内していただきました。ボストンは、アメリカでは公共交通がよく発達した便利な街ですが、少し郊外に出ると、やはり車がないと不便なようです。

この学校は中高一貫の私立学校で、New England のトップレベル校の一つということらしく、Harvard 大学や Boston College をはじめ、アメリカの有名大学に多くの学生が進学する学校として知られているようです。授業料は年間約4万ドルということですが、私立大学の5~6万ドルよりは少し安いようです。そうはいつても、日本の私立学

---

<sup>A</sup> 北海道情報大学経営情報学部

校・大学とは比べ物にならない金額です。朝8:00の全校集会 assembly (写真1) から始めて、3つの授業(物理、日本語、歴史)を参観しました。どの授業も10人前後の少人数で行われるため、教員と生徒の対話で進められるのが、共通していました。朝の assembly でも数組の生徒がそれぞれのテーマで数分間のプレゼンテーションを行っていましたが、授業でも生徒が発言する機会が多く、これがうわさに聞くアメリカのコミュニケーション力をつける教育かと納得しました。当校の中学部でも、全員が集まって、数人一組ずつのプレゼンテーションを行っていましたが(写真2)。物理の授業は、教員と生徒が iPad で宿題を共有し、PCと紙プリント、示範実験などを組み合わせて行ういわゆる hybrid 型の授業でした。これは、近年、日本でも本格的に取り組み始めた Active Learning の一形態です(写真3)。



写真1 Noble and Greenough School で毎朝行われる assembly



写真2 Noble and Greenough School 中学部のプレゼンテーション授業



写真3 Noble and Greenough School の物理の授業

University of Massachusetts Boston (UMass Boston) は、地下鉄 Green Line の JFK/UMass Boston 駅から大学の無料のシャトルバスで5分ほど行ったところにあります(写真4)。地下鉄で行けるので、アクセスはよい大学です。UMass Boston は、11のカレッジと大学院からなる学生数17,000人の州立大学です。発達障害学生への対応、国際交流、Enroll management の実情について、説明していただき、意見交換しました。



写真4 UMass Boston キャンパス

発達障害を持つ学生について、日本では、発達障害であることを開示しないことが多いのですが、アメリカでは保護者も開示することを望み、身体障害と同様に積極的に支援を受けるようです。日本でも、大学生の6%くらいはいるといわれる発達障害ですが、中でも自閉症のようなコミュニケーションに課題がある場合には、グローバル人材育成を広める中で、その流れから排除される可能性があるかもしれません。また、UMass Boston でアメリカの発達障害児教育の実情について説明してくださったのは、日本人の南拓矢氏でしたが、氏は小学校時代をアメリカで過ごした帰国子女で、日本の大学を卒業した後、アメリカの大学

院に進学し博士号を取得されました。約6年間アメリカで教育を受けたため、小学校を終了するころに帰国したときには、日本との文化のギャップに困惑したそうです。このようなことは、学生が留学したときにも起こることで、学生が成長するうえで必要な経験だと思います。

Vice Provost の Schuyler Koban 氏 (写真5) とは、国際交流について話し合いましたが、本学が進めているタイ・ラジャマンガラ工科大学タンヤブリ校との ICT 作品共同制作型ワークショップに対して、強い関心を示され、参加の希望を示唆されました。しかしながら、今の体制で UMass Boston も参加すると、私の勤務校では、人的にも、資金的にも、対応が難しくなります。本学と協定を調印している他の大学からも、同様な希望があるため、新しい実施体制を工夫することで、これらの協定校の参加を実現する方向も検討した方がよいと思っています。



写真5 UMass Boston の Vice Provost Schuyler S. Koban氏 (左)

Assistant Vice Chancellor の John Drew 氏とは、Enroll Management について、意見交換しましたが、UMass Boston で行われている学生支援の体制は、私の勤務校で実施している支援体制と概ね同様であることが分かり、これまで私たちが行ってきた学生支援は、世界に通用するものだという自信が持てました。

Boston College は、ほとんどのアメリカ人が知っている有名大学です。学生数は、約14,000人です。College は、通常 Liberal Arts 大学に使う名称ですが、Boston College は総合大学と位置付けられています。しかし、イエズス会が経営する宗教色が強い大学で、制度面でも教育内容でも Liberal Arts 教育を重視しているようです。Boston College の卒業

生には、かつてのアメリカ合衆国民主党大統領候補で、オバマ大統領政権の国務長官を務めた John Kerry 氏を始め、各界の有名人が多数います。

ボストン市郊外の Newton 市および Brighton 市にまたがる広くて閑静なキャンパスへは、ボストン市内の Copley から地下鉄 Green Line (Riverside Line) を利用して大学近くの Chestnut Hill 駅まで30分程度で行けます。ただし、地下鉄とはいっても、路面電車のようなもので、郊外では地上を走っています (写真6)。この日の空は、ボストンで初めて晴れ渡り、すがすがしい気分地下鉄の駅へ向かいました。



写真6 Copley 駅から Newton 市方面へ向かう地下鉄

Boston College では、Liberal Arts 部門の Director である Mary. T. Crane 氏にお会いし、Liberal Arts 教育について、説明していただきました (写真7)。入学後2年間行われる Liberal Arts 教育に対する学生の興味関心が、この数年弱くなっているということで、2人の教授が担当する学際的なコースを作っているということでした。これについては、日本の大学でも同様な事情があり、Boston College の事例だけから一般論に敷衍はできませんが、日米の大学事情に共通点があるように感じました。余談ですが、ボストンから帰国して間もなく、国際学会でタイへ行きました。その際に、バンコクの飲食店で偶然同席したアメリカ人と大学教育について話し合ったところ、40代か50代くらいに見える彼が学生時代に興味を持って受講し今でも印象に残っているのは、複数教員が担当した学際的な科目だったということでした。これとは少し異なりますが、日本でも近年、学部学科の枠にこだわらない学位プログラムの議論があり、ユニバーサル・アクセスの進行と高等教育の質保証の観点から教育システムの改革は進むような気が

します。



写真7 Boston College の Director of Liberal Arts  
Dr. Mary. T. Crane 氏



写真8 Boston College のキャンパス

渡米する数日前に、近藤氏から連絡があり、ボストンで毎年開催されるキャリア・フォーラムを見学できることになりました。このイベントは、主としてアメリカ在住の日本人学生の就活を支援するイベントで、毎年ボストンで開催され、今年は、ちょうど30回目になります。



写真9 キャリア・フォーラムの様子

会場は、私が宿泊していた Copley Square Hotel

のすぐ近くだったため、ホテルのロビーで近藤氏と待ち合わせして、一緒に見学しました。会場への入場証は、IACE TRAVEL の成田敦氏が手配してくださいました。会場に入ってから、まず驚いたのは、あまりに多くの日本人学生がいたこと、日本と同様に、全員がいわゆるリクルートスーツを着ていたことでした。参加者数は、3日間の開催期間になんと延べ15,000人です。大多数がアメリカ在住の日本人学生でしたが、少数ながら日本から参加した学生もいました。参加企業は、大半が日本の企業および団体でしたが、Amazon、Bloomberg などアメリカの有名企業も含めて200社以上が参加していました。各企業がブースを構え、学生たちが、それぞれ関心のあるブースに立ち寄って、説明を聞くというスタイルも日本と同様でした。何人かの学生にインタビューしましたので、学生から聞いた内容の一部を以下に記します。

- アメリカで生まれ、中高は一時日本に戻ったが、その後アメリカで大学に進学した。アメリカ国籍も持っているので、それを生かしてアメリカで働きたい。
- 日本から来た。日本でも就活するが、アメリカでもいい就職があれば、考えてみたい。
- 大学からアメリカに来ている。できればアメリカで働きたいが、日本企業に就職したい。勤務地はアメリカでも日本でもよい。
- アメリカで中高大学まで進学したが、日本の役に立つ仕事をしたいと考えるようになった。日本のよいところがわかるようになった。



写真10 近藤信之氏（左）とキャリア・フォーラムにて

ボストン滞在最終日は、いよいよ最大のイベント、近藤氏との夕食会です。近藤氏と私の他に、

ボストン日本総領事館・領事の藤井麻理氏、IACE TRAVEL アメリカ副社長の成田敦氏が出席され、おいしい料理とワイン、楽しい会話であつという間のひとときでした。SCOTCH & STORIES という名のこのレストランは、ほどよい広さの店内に、食事用の数席のテーブル席とバーがバランスよく配置され、明るすぎない照明とシックな内装で、とても感じがよく、くつろげるところでした。IACE TRAVEL でのインターンシップは、この時に話題になりました。

ボストン滞在中は思いのほか忙しく、名所見物などはあまりできませんでしたが、アフターファイブは、私の好物のビール、ワインを楽しむことができました。また、キャリア・フォーラムのあとや会食では、とてもおいしいウイスキーを近藤氏からごちそうになりました。滞在最終日の会食前にボストン美術館 (Museum of Fine Arts, Boston) を見学する時間が取れたのは幸運でした。世界の著名な美術館に比べて、近現代の目玉となるような有名な絵画はあまり多くはありませんでしたが、アジア、ヨーロッパ、アメリカ、エジプト、ギリシャ・ローマなど世界各地の美術品を始め、古代エジプトから現代アメリカの美術作品まで展示し、幅広い空間軸と時間軸で構成されたスケールの大きな素晴らしい美術館でした。欧米では珍しくありませんが、この美術館でも気に入った絵を模写する学生を何人か見かけました。美術館が身近な学びの場であることは、素晴らしいことです。

アメリカ合衆国の歴史は、ボストンがあるニューイングランドから始まり、先住民を巻き込んだフランスとの植民地戦争、ボストン茶会事件等をトリガーとする独立戦争、そして南北戦争を経て、経済基盤や文化が異なる地方が合体して国をつくり今日に至っています。ある意味では、北アメリカ大陸でいくつかの国がグローバル化によって結びついて出来上がった連合体と言えるかもしれません。分裂しそうに分裂しない国民に共通する何か強固な基盤をもつ国だと思います。その基盤が Liberal Arts かどうかは判断できませんが、アメリカを子細に観察し、考察することで、グローバル人材育成のヒントになるものが見えてくるかもしれません。残念ながら、今回の滞在では、そこまでの知見を得ることはできませんでしたが、アメリカの高校、大学の現状をいくつか視察することから、日本の学校教育との共通点や異なる点、あるいは参考になる点などが多少は、見

えてきました。これらを今後の大学教育に生かしていきたいと思います。

あつという間に過ぎたボストン滞在でした。夕食後は、その日に訪問した大学等のメモを作ったり、本務校の業務メールを確認したりと、結構忙しい毎日でしたが、大変楽しく充実した時間が過ごせました。最後に改めて、近藤信之氏、小野博会長、理事の皆様、会員の皆様に心から感謝して報告を終えることにします。

受付日2017年2月9日、受理日2017年3月30日